

33 我が街 船橋を歩く—船橋の魅力(4) 家康と船橋(4) —江戸城防御の街道、起点の街 船橋と四谷—

29 期仲田 元昭

今回は、徳川家康が東西からの防御と退避道として造成されたと言われている、江戸城内堀の半蔵門が起点の甲州街道と船橋が起点の東金御成街道についてご案内します。

「甲州街道—西からの防御と退避道—」

甲州街道は、家康が江戸に入府して12年後の慶長7年(1602)に江戸城に危機が及んだ時の防御と退避道として半蔵門起点に甲府城まで造成されたと言われています。

街道沿いの四谷には砦用に多くの寺院を置き、その裏に同心屋敷を連ね、短い街道であるにもかかわらず、小仏・鶴瀬に関所を設けています。また沿道の四谷に伊賀組・根来組・甲賀組・青木組(二十五騎組)の4組から成る鉄砲百人組が配置されました。根来組を任されたのが家康の側近、船橋で最初の大名「成瀬正成」(後に犬山城初代藩主)です。

成瀬正成は、天正12年(1584)に小牧・長久手の戦いで功積を挙げ、翌年、家康より根来衆50名を与えられ、この鉄砲隊が後に根来組といわれる百人組の部隊になります。また、天正18年(1590)の小田原征伐で功を挙げ、家康が関東に移封されると下総国葛飾郡栗原郷(現在の船橋西部)に知行所4,000石を与えられました。

江戸では四谷に屋敷を与えられ、組下の根来組を内藤新宿に配置し甲州街道の防衛に当たったと言われています。江戸 四谷見附には成瀬正成江戸邸跡(現上智大学の前 JR四谷駅麴町口 出口前)が、西船橋の宝成寺には市の指定史跡である成瀬家の墓があります。

「東金御成街道—東からの防御と退避道—」

東金御成街道は、甲州街道が出来て12年後、鷹狩のためと共に大坂夏の陣の前年であり東からの防御と退避道として船橋を起点に東金まで造成されたとも言われています。

街道は、家康が佐倉藩主土井利勝に命じ、沿道97ヶ村の名主を佐倉城に集め工事区間を決め、慶長19年(1614)に10カ月の突貫工事で造られたと伝えられ、旧道より道幅を6mに拡幅し、谷津の谷は直線ではなくS字カーブとし東金までほぼ直線で結ぶ街道としました。距離も旧道より約4.1km短縮の37kmで、警備をし易く一度に攻められない様に工夫したと言われています。

外堀完成後(1636年)は四谷見附が西からの江戸城防御の甲州街道と船橋は東からの防御の東金御成街道、共に起点となる重要な街であったようです。

東金御成街道が完成してからは、大坂夏の陣に勝利し世の中が安泰へと向かい、防御と退避道として使われることはなく、家康が2回、秀忠が10回、家光が1回東金への鷹狩の途中に船橋をお通りになり、船橋御殿に宿泊・休憩をしています。



東金御成街道にある明治の建造物(森田呉服店)

(参考図書: 千代田区生涯学習資料^o、東金御成街道史跡散歩、船橋地名研究会資料他)

「34 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力(5)」に続く「2023-9-1 寄稿」